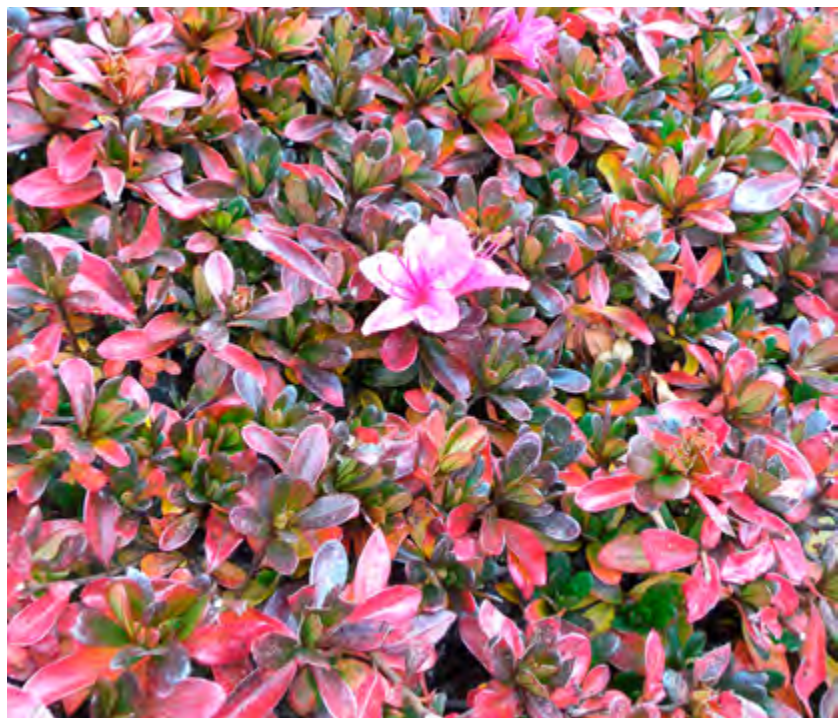


あを 12

2017



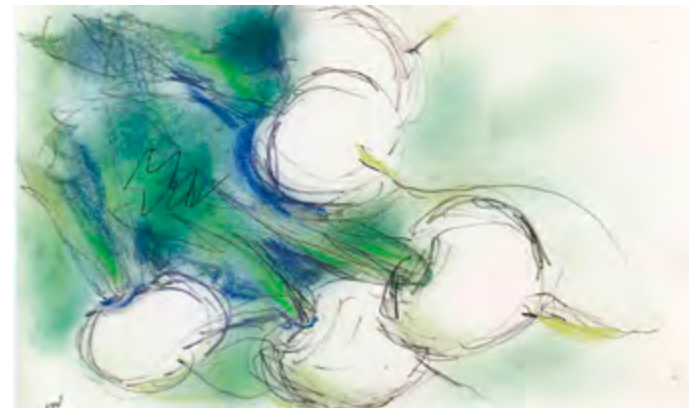
つ寝るべし
一山とす
又の四馬

松興



あそ

十二月



秋風

東京

佐藤 喜孝

かさねたる遠のく秋の蛇の背に
小六月四角い家から箱が出る
妻の歳一つふやせり秋日和
横たはる體の下を秋の風
冬の雨銀座の鳩はよく歩く

行く秋

埼玉

須賀 敏子

起重機を真ん中に置き秋の虹
山下りて稔り田の中出湯かな
二階まで琉球朝顔咲き継ぎぬ
赤みどり名も新しき葡萄たる
喜んで猫と留守居の敬老日



東京

田中 藤穂

ポポーの実

ポポーの実少年の日の兄の影
霧の温泉足をゆらせば人魚めく
パソコンと無縁なる指栗を剥く
月の句座医師と僧侶の布袋腹
抵抗の一票投じ秋刀魚買ふ

三重

長崎 桂子

立冬

芯は紅レースの如し櫛紅葉
爽やかやピアノ囁き高鳴りて
立冬の風に川音調和する
立冬も朝の散歩の老元気
街路樹を照らす朝日も冬に入る

東京

森 なほ子

来ずなりて

使はれぬ外階段に秋の蝶
湯の町の秋の祭を通り過ぐ
望の月芙蓉の葉末揺る上
肉焼ける烟も供養御命講
来ずなりて惜しむ豆腐屋秋の暮

埼玉

山莊 慶子

秋深む

手づくりの甘酒とどく夕べかな
朝顔の蔓はリースに幼たち
草の原残らず刈られけふの月
静けさに緑の蒴果棉を吹く
秋深む思ひ通へる友のゐて



東京 赤座典子

長月

さやけしやカルボナーラの赤胡椒
俯きて円陣組める秋明菊
長月や母の蹟く新聞紙
台風裡校庭よぎる石たたき
物言ひて一氣に速む秋入日

埼玉 秋川 泉

声を聞く

昼の道死んだふりする竈馬
大病を生きぬいてゆく九月尽
秋寒し何で今する総選挙
目をこらし失せもの探す萩の声
紫蘇の実の始末遅れて母の声

東京 石森 理和

塩田平

温々し筆柿ごろりゴロゴロリ
初冠雪見えない空気を食べ尽くす
日が沈み塩田平は初冬なり
のどかさや稲刈り済みし塩田平
二拾程銀杏拾ふ前山寺

埼玉 大日向幸江

カレー

カレー続き又今日もカレー枯葉色
忘年会締は河豚の雑炊で
湯煙りの別府の町や十二月
小春日やまどろむ猫の爪を切る



千葉 黒澤 佳子

ねこじやらし

ぐい飲みにねこじやらし挿し男の子
夏痩せの友を氣遣ふ吾も瘦
葉鶏頭垣根を越えて根付きたる
グラタンに覗く天火や秋の暮
秋霖や和室の敷居キシミおり

東京 七郎衛門吉保

秋味覚

カタカナの名札溢るる新葡萄
翠色マイヤー檸檬のジャムつくり
肉じゃがの湯気に揺られし顔と声
季題「栗」考へ皮剥く男の手
実石榴や落ちてても子安地藏ふう

東京 篠田 純子

秋

豚汁お替り女子寮秋の暮れにけり
小名木川の岸は直角秋の暮
ウミガメの孵化守るテント秋の雨
α波と波音ばかり秋の雨
秋の暮空地を囲ふ棒斜め

石川 定梶じよう

一本杉

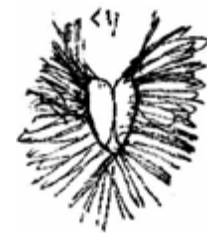
まだ咲かぬ蕊のけなげさ曼珠沙華
どの家か時報打ちたる月の路地
道あれば電線が沿ひ秋燕
沼のある山の向かうへ銀河の尾
秋高し一本杉の立つことも



忘れものの届けやうとても秋風	佐藤喜孝
帰燕仰いで立ち番の巡査かな	定梶じょう
鹿避けの柵を開いて登山道	須賀敏子
磔刑のかたちに醒めて秋暑し	田中藤穂
ハモニカのたどたどしく過ぐ秋の昼	長崎桂子
スカイツリー眼下にいくつ秋祭	森なほ子
母と子のラジオ体操蟹もゐて	山莊慶子
四才児「そもそも僕は」と敬老日	赤座典子

鉄橋の月に臍あり終電車	秋川 泉
蝉時雨箱根を下る救急車	石森理和
秋風を見る度憶ふ故山かな	王 岩
鳩サブレぺきんと割れて七五三	大日向幸江
夏風邪に舌舐りの熱の花	黒澤佳子
稲架の棒役終え風とじゃんけんぽ	七郎衛門吉保
私道なりと通さぬ棒や秋の暮	篠田純子

喜孝抄



ジャングルジムは別のからっぽ夏休

佐藤 喜孝

夏休みはにぎやかに子供達が公園で遊んでいる景を思うのですが、この句の中に子供の姿はありません。平成の現代は、夏休みも子供達は自由になる時間がないのでしょうか。家の中に籠もっているのでしょうか。がらんとした公園のジャングルジム。「からっぽ」と言う言葉と響きから何か淋しい悲しさが感じられるのです。夏休みと云うのに。(泉)

落蟬をそろりと啞へ鴉発つ

篠田 純子

「そろり」がいいですね。いかにも鴉です。他の鳥なら「さつと」でしょうか。鴉は都会の鳥類の頂点だから、あわてる必要がないので

す。落ち蟬、食べてもおいしくはなさそうです。しかもまだ足が動いていたにして。そつと持ち帰って子供のおもちゃにするのかも、なんてことまで思わせる「そろり」でした。(なほ子)

コロッケ店日覆深く下ろす頃

定梶じょう

どこの街にもある小さな肉屋、コロッケが人気。夏の午後のどこか懐かしい風景。昼時の忙しさも一段落してショウケースに西日があたり始めます。店主が日よけを深く下ろし夕方までちよつと一休み。商店街の人通りも絶えました。

(なほ子)

新涼やクロールの少年の脛

須賀 敏子

新涼というすずやかな季語(本当は暑さ真つ

盛りですが)にクロールをする少年のすらりと

細い筋肉、なんとも涼しげ。クロールでなくては、少年でなくては。感覚の鋭い、類想感のない句だと思いますが。(なほ子)

甚平や思ひ出す人三人程

田中 藤穂

ユニークな句です。甚平すがたで思い出す人が三人ほどいらつしやると。お父様、ご主人、あとの一人は近所のおじさん、と、私は勝手に想像したのですが。作者の記憶にその甚平姿を留める三人の男たち、皆寛いでいい顔をされていることでしょう。(なほ子)

一点を競ふ球児の秋暑し

長崎 桂子

立秋の八月七日から始まった十五日間の全国高校野球選手権大会。今年は台風五号にみまわれ大変でした。しかしいざ試合が始まるとまさに

一点を競う熱投甲子園でしたね。(泉)

晩夏かな修道院の草も木も

森 なほ子

あゝ夏が行ってしまう……と云う物寂しさが修道院の静かな雰囲気にとびつたりでしばし瞑想してしまいました。まだ暑さはあるのに夏の終わりはとてもロマンチックな感じがします。

(泉)

色薄き初コスモスの七曲り

赤座 典子

初秋にどちらにドライブされたのでしょうか。可憐なコスモスが咲き始めた幾重にも曲がるつづら折りの道を走り抜けて気持ちの良い一日を楽しまれたことでしょう。(泉)

遠花火約束いまだ果たされず

秋川 泉

遠花火ってなんだかしんみりするものです。

広い夜空の片隅にぼつと開いて、音もなくきえてゆく。近い花火との落差有り過ぎ。作者は遠花火にまだ果たされていない約束のことをふと思ひ出したのです。それはこの先果たされることはあるのでしょうか。(なほ子)

惜しみ鳴く夜昼間はぬ鉦叩

石森 理和

カネタタキはバツタ目コオロギ上科カネタタキ科の昆虫。夜行性で気温の低い秋以降は昼夜を問わず鳴きます。この声が高い金属音のように聞こえます。さて作者は、この声が耳について少々悩ましく感じられたのでしょうか。

(泉)

裏庭に猫の出るなり遠花火

大日向幸江

裏庭に時々遊びに来る猫。今夕もちょうど猫が顔を出して遠くで花火が上がりました。「あ



いづぞやの純子さんの句では散歩車に六人の園児でしたね。この度は箱詰めの桃からの連想です。この桃六個いりでしょうね。まるまるした柔らかなそうな桃と園児、ぴったりの連想ですね。ピンクの頬が見えてきます。(なほ子)

ら、また来たの」と声を掛ける作者。猫と一緒に夕涼みです。（泉）

冷奴吾は絹ごし夫木綿

黒沢 佳子

なんかほほえましいと最初思いましたが、よく読んだらなかなかの奥様ではありませんか。長年一緒に暮らしても食べ物の好みは夫婦随（またはその逆）にはならないものでしょうか？ のご夫婦どちらが頑固、というよりそれぞれの好みを尊重して、木綿と絹ごし両方を用意されるまめな作者ということでしょうね。さぞ円満なお二人なのでしょう。（なほ子）

散歩車の園児のやうに桃並ぶ

七郎衛門吉保

先日私も偶然散歩車というものを初めて見ました。保母さんが二、三歳くらいの幼児をひよいひよいと抱き上げては積み込んでいました。

毎月定額100円 定価1冊100円(税別)	月刊	俳句界	2018年 2月号
 前川喜平 の元会長の巻	伊丹三樹彦	大野護士	代表句と年齢

比来披見

ホトトギス 十一月号	稲畑 汀子
水音の中にありけり小六月	稲畑 廣太郎
水に浮くものを灯して冬紅葉	
沖 十一月号	
撓りよき棒高跳びや鵬の晴	能村 研三
雨月 十一月号	
蓮開き切らざる姿尊しや	大橋 眺
槐 十一月号	
空間と時間しかない夏座敷	高橋 将夫
馬酔木 十一月号	
無患子の艶や波郷の丸眼鏡	徳田千鶴子
風土 十一月号	
ざりがにの畦に出てゐる盆の月	南 うみを
京鹿子 十一月号	
ぶだう一房ふるさとを裏返す	鈴鹿 呂仁
六花 十一月号	
らふ燭の灯のほろ酔に秋深む	山田 八甲
万象 十一月号	
秋の野のビール飲みたし夢の中	大坪 景章
河童忌や田端の深き切通し	内海 良太



喜孝

春燈 十一月号	安立 公彦
爽涼の一湾占むる桜島	
鳴 十一月号	
鶺鴒の流れ走りと言ふべかり	高橋 道子
末黒野 十一月号	
梅雨晴の菜園蝶の三つ巴	小川 玉泉
虫の夜や水たつぷりと水仕妻	松本三千夫
雲の峰 十一月号	
五六行書きては酌める秋の宵	朝妻 力
萱 十一月号	
手花火の四谷花街通りかな	木村 嘉男
翁とはおこがましけり一葉落つ	亀田虎童子
秋蝶の近寄つてくる老いたるや	小島 良子
霽 十一月号	
いつか虫絶えて耳鳴り沁みる闇	松林 尚志
子規の机	
子規の汗染むや机は挟られし	藤田 宏
こだま 十一月号	
暴走台風議席三分の二残し去る	松林 尚志

あをキーワード俳句辞典(ながーなく)

流れ

狐川辛夷の中を流れつゝ
沢水の流れ細かり山眠る
冬の雲のまにまに流れけり
かさ増せる信濃小流れねこやなぎ
呼子鳥厚き大氣の流れ来ぬ
流れ落つ養老の滝暮れ遅し
山葵田の冷たき流れ手ですくひ
反橋の霜すらすと流れけり
曇目に流れて春の時すぎる
白桃をむくとき時の流れあり
加速して滝垂直に流れ落つ
水馬踏んばつてゐて流れゆく
夾竹桃雲の流れしあとの空
星祭流れるやうに人坐る
釣り忍翁媼に流れ弾
小流れのにじむ辺りの青千草
何処へか流れるやうに去ぬ燕
飯場から流れる唄やをみなへし
小流れの水のにごりや夏落葉
荒川の黒き流れや冬の雁
花うつぎ池に流れのゆるくあり

井上 石動
王 岩
河合 笑子
鎌倉喜久恵
栢森 定男
関口 ゆき
佐藤 恭子
後藤 志づ
佐藤 喜孝

令法の芽紙のうすさに水流れ
ホスピタルハープ流れて夏来る
一瀑に風湧き風の流れをり
流れ着くハンデル文字のラムネ瓶
春動くジャズの流れる歯科医院
REAL LOVE流れる麵屋風ひかる
初冠雪和子の雲が流れ行き
熱帯夜尾灯の流れたえまなく
梅はつぼ雲やはらかく流れゆく
赤とんぼ風に逆ひては流れ
目で追ひし風の流れやシャボン玉
キラキラと柳のわたげ流れゆく
夏の夜明け深深とした気の流れ
箒目の流れもゆるく春隣
弁財天にラップ流れて路地晩夏
里山の流れもいつか水澄めり
身最肩の校歌流れる夏の空
溶岩の流れし跡に富士薊
川風に乘つて流れる踊の輪
盆唄が隅田の川面流れ行く
落椿少し流れて沈みけり
根回りも流れも染めし金木屋

山莊 慶子
篠田 純子
篠田 純子
篠田 純子
篠田 純子
芝宮須磨子
芝宮須磨子
芝 尚子
芝 尚子
秋川 泉
松本 米子
森 なほ子
森山のりこ
須賀 敏子
石森 理和

渡邊 友七 々 々 々 々 々
東 亜 未
藤野 寿子
堀内 一郎 々 々
木村茂登子
鈴木多枝子 々
定梶じょう
河合 笑子 々
篠田 純子 々 々 々 々

A simple line drawing of a rabbit standing and holding a small plant with two leaves in its paws. The rabbit has long ears and a small body. The background is plain white.

態だったと言いつて耳から目から私の体が受け止められないほど経験した。

大戦二ヶ月前に生まれた私は、さぞや両親に苦勞をかけたと思っている。今でもそのことを思うとぞっとする。しかし生まれたばかりの私にはこの戦争の責任はない。国の宰相たる者は、如何なる手段を用いても、自ら自国民を戦争に巻き込んではいけないのである。それが首長たる者の義務である。

この句は十二月八日ラジオ体操をしている人々は皆元氣ですよ、私も。とラジオ体操は道具を使わなくて運動が出来るので、誰にでも何処にいても出来るのでいい。今ならマラソン・有酸素運動などと言う早歩きをよく街中で見かける様になった。体を動かすならラジオ体操はいい。それにつけても戦後六十二年もたつとあの時の悲惨なこと凄惨な体験は忘れてしまうのだろうか。今イラクで行われていることは何だろう。このきつかけとなったアメリカの言い分「大量破壊兵器を持っているようだ」と他国に攻め入った。それが今日まで続いているあの悲惨なことだ。

今日十二月七日テレビで政府高官といわれる方が「あ

の国の人々はとても生活に困っているようだ。だから助けに行つてあげなくては。」何と傲慢な言い方であろうか。

宗教とは何だろう。神に求めるものは何なのか。敬虔なクリスチャン、真摯な仏教徒と言われている方々の考えは如何なものか。無宗教の私には、肌色の違い信じる神の違い、住んでいる国の違いなど人と接するときには全然気にしない。気にしていないと言うより頭がない。どうにか自分の伝えたいことがつたえられればいいと思っている。

軍隊を派遣することを決めた日本は、本当にイラクの人を助けに行くのだろうか。正当防衛という詭弁も時には使うようだが。十二月十日の各新聞の社説を是非見比べて欲しい、機会があったら。

戦争に行かされた父の言葉が今、思い出す。まだ中学生だった十五歳の私に向かつて「戦争へ行つたら事の善し悪しが分からなくなってしまう。」と中国での事を悔いていました。今更ながら、あの時の父の顔が懐かしい。

ふりむきてあぎと痛むる青写真

書名となった『青写真』の句である。題名に選んだのであるからは掲載句中一番思い入れがあるのではなからうか。

二十年前にこの句集が上梓されたのだが、作句したのはそれ以前となる。今この句を読んでもみると今の時代に詠んだような錯覚さへ覚える。誰にでも小さい時から今の自分の年に至るまでその時々により将来の夢、希望がある。学校にもまだ行っていない小さい時、大人の人に「大きくなったら何になりたいの」と聞かれると、今も昔もあまり変わらない言葉が返ってくる。お花屋さん・ケーキ屋さん・お嫁さん・パイロットなど。年齢によって変わる人もあるし、一貫して最初の夢を貫く人もいる。どちらがいいか人それぞれである。

一生懸命生きてきて、ふと振り返つてみると思い描いていた夢（青写真）とはかけ離れた道を歩いているように思った。「あぎと痛むる」と言う言葉で力一杯生きていることがよく分かる。この文章を書いているうちに

はつと「青写真」は季語として使つたのではと……。

青写真は日光写真とも言つて私達の小さい頃はみんなで日の向く方へかざして遊んだ。今では日光写真で子供たちが遊んでいるのを見ることが出来なくなつてしまった。青写真の世界は黒と白の二色の世界、それも反転している。世の中の矛盾を「青写真」という季語を使い十分に言い得ている。

私の最初の季語として使っていない鑑賞では、作者の作句の意図と違うかもしれないと思つてきたが十分私はたのしんだ。

うたかたといへどあなどりがたき今

「うたかた」泡沫と漢字で書く。漢字で書くと泡という字が目飛び込んでくるので意味は分かりやすい。しかし意味合いからするとかな文字で表記した方が私は好きだ。

シャボンの泡、水面にできた泡、川に家庭排水が流れ込んでできた泡。何でもいいのだが泡は出来やすく又消えやすいものである。そういうものの喩えに使われる。

意味は簡単明瞭、泡と雖も侮ることは難しいよと自身に言い聞かせている。

『今』と言っている。この今に私は興味を持った。『太平記』に「災変起くれば国土乱る、是上慎まず、下あなどる故なり」。我々庶民にとつていつの世も、上からの御達しにより身の回りの環境が変わることがある。男の子が産まれたら、父母が味わったあの「赤紙」というさびしい知らせが来ないうちに早く大きくなつて欲しいと思い、徴兵制などという理不尽な制度が制定されないようになど……。

昨今世の中が、私が望んでいるような穏やかさを欠いてきている。誰のせいでも無いような気がする。一人一人が自分の意を持つていけば流されることもないと思う。人間それほど馬鹿ではないのだからと思うようにしている。

(二〇〇三年記)



世の中がふんどし解けて不覺かな
濡れたる額 鯨べる上役 食かな
而路秋や胸掛して石俤
日の入りのようし月を待ちもけり
妓生と雨月の船は催合傘
いつまでも續く暑さや秋蚊帳
秋燕や廊の中の干鰯
大なる高麗の野菊の濃かり

白樺の窓に住んで獵はじめ
雨相風や剣ねてこなき鳥民
人面りしぐたりなる回かな
屋根葺けば残るぬ草やけり
干葉にこび追はるる子豚かな
寂摺の灯にとべるものあり
冬椿の序ふえて抄らぐ
曳いて来る鯨につける鰓かな

想ひ出の往事なつかし古屏風
句屏風や己に故人の三猿郎
病人は出て入りしけき屏風かな
湯氣出でて旅の身乾く秋火かな
遠露の白帆消にけり白馬江
猫の子の轉ぶかに抱く手紙かな
仲よしや相ふれましてゆく日傘
おそろしくまけたる西瓜漬にけり

送り出て秋の水べに佇きにけり
鬼灯も咲いて見送る女婦かな
木の葉髪(や)やあけてさびしけれ
閑めきて白き障子や十三夜 病中

あとがき

なんと云ふ一年であつたらう。結婚以後わたしも恭子もひたすら走つて走つてきた。一年前、恭子にアルバムでも見やうかと云つたら、顔を横に振つた。といふことでこれから前をひたすら前を見て進んでゆきたい。

生業を息子に託して大分楽になった。が、なかんだとやはり師走らしくあわただしい。皺寄せが、いろいろ出たが、あをの遅刊を除いて何とか辻褄を合はせた。「はしたて集」を来月に回させていただき今号を出します。いろいろ書きたいことがあるのですが落ち着いて来月号に書きます。(12月29日記)

傳句会予定

1月30日 阿佐谷地域区民センター 第8集會室
2月6日 阿佐谷地域区民センター 第5集會室
集會室は抽選ですので月により室が変わりますのでご注意ください。

ご芳志多謝

田中 藤穂 様

石森 理和 様

あをやぎ句会 様

(喜孝)

二〇一七年十二月号

発行日 十二月二十九日

発行所 東京都中野区中央2-50-3

電話 090-9828-4244

ファックス 03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／松村美智子・福井美佐子・ティリエイマ

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行から 10120 45864021

他銀行から(普)(店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)